

ランチョンセミナー2 山中の蘇生例1

富士山 8 合目（海拔 3100m）における心肺停止例

前田宜包（まえだよしかね）

富士吉田市立病院 救急科



富士山吉田口登山道では7合目と8合目に救護所があり、2007年から全山小屋にAEDを装備し、山小屋従業員に対してBLS(一次救命処置)講習会を実施している。

富士山8合目で心肺停止(VF)となりながら、適切な救助活動により救命し得た1例を経験したので報告する。56歳、男性。単独で登山中、富士山8合目(海拔3100m)で突然昏倒した。居合わせた外国人医師が救助に当たるとともに同行者が8合目救護所に通報した。自動体外式除細動装置(AED)を持って出発し、昏倒から30分後に胸骨圧迫を受けている傷病者と接触した。AEDを装着したところ適応があり、除細動を施行した。間もなく呼吸開始し、脈を触知した。呼吸循環が安定したところでキャタピラ付搬送車(クローラー)で下山開始。5合目で救急車とドッキングし、約2時間後山梨赤十字病院に到着した。第1病日に施行した心臓カテーテル検査で前下行枝の完全閉塞、右冠動脈からの側副血行路による灌流を認めた。低体温療法を施行せずに第1病日に意識レベルJCS I-1まで回復し、特に神経学的後遺症なく4日後に退院となった。

富士山登山者は年々増加し、それとともに心肺停止例も増加している。2006年2例、2007年1例、2008年5例、2009年2例、2010年3例発生している。山中の心肺停止の蘇生は多くの場合は成功しない。中には蘇生を継続したままクローラーを使用して下山、ふもとの病院まで2時間以上かけて搬送するケースがある。救助者の安全確保の観点から、現場での蘇生を試み15分以上経過しても心拍再開しない場合は死亡宣告をして、遺体として搬送するルール作りも必要である。

横浜出身 49歳

日本救急医学会 専門医、日本集中治療学会 専門医

昭和61年山梨医科大学卒業 第1外科入局

平成18年 富士吉田市立病院 救急科

(平成14年より富士山吉田口登山道8合目救護所に参加)

ランチョンセミナー2 山中の蘇生例2

日本山岳耐久レース（長谷川恒男 CUP）の経験から

神尾重則
落合クリニック



日本山岳耐久レースは（東京都山岳連盟主催）は、奥多摩の山々を舞台に 71.5 km の山岳コースを、制限時間 24 時間で踏破するレースである。1993 年に第 1 回大会が開催されて以来、毎年 10 月に行われている。過酷なコースとなるため、セイフティ・ランとレース参加前の健康診断が推奨されている。コース上には競技役員と救護隊をかねたレスキュー・マーシャルが配置されているが、最終的な安全確保は、競技者の自己責任に委ねられている。

今回のセミナーでは、レース中に 47km 地点の御前山で心停止をきたし、適切な心肺蘇生術（Cardiopulmonary Resuscitation;CRP）と体外式除細動器（Automated External Defibrillator;AED）の使用により、救命かつ完全社会復帰しえた症例を紹介する。

山中というきわめて困難な状況の中で、救急の輪が効果的に機能した幸運かつ貴重なケースであり、山岳レスキューにおける AED の有用性を示唆するものと考えられる。本大会のような山岳レースにおいても、各ポイントやレスキュー・マーシャルには、AED の配備が望まれる。また、医療従事者や山岳指導者には、救命処置の習得のみならず、その普及と啓蒙に努めることが求められている。

連絡先：抄録集に記載

ランチョンセミナー2

新しい心肺蘇生ガイドライン 2010 と AED

小菅宇之（こすげたかゆき）

横浜市立大学附属市民総合医療センター高度救命救急センター

2010年10月に新しい心肺蘇生のガイドライン2010がILCOR（International Liaison Committee On Resuscitation：国際蘇生連絡協議会）より発表された。以前のもの大きく変わった点は、いままでのABCからCABへの変更である。胸骨圧迫の重要性がさらに強調され、気道確保（A）→人工呼吸（B）→胸骨圧迫（C）から、胸骨圧迫（C）→気道確保（A）→人工呼吸（B）へと変更になっている。この流れに準じた、心肺蘇生法の概略とAEDの使用法を概説する。また、心肺停止時に使用したAEDより回収した内部データとその検討より得られた知見をお伝えする。

経歴

平成2年3月 横浜市立大学医学部卒業

平成6年3月 横浜市立大学医学部大学院（第一外科学教室）卒業

済生会横浜市南部病院心臓血管外科、神奈川県立足柄上病院外科、神奈川県立循環器呼吸器病センター心臓血管外科に勤務。

平成12年10月より、横浜市立大学 救命救急センター

平成19年4月より准教授

現在、横浜市消防局 救命救急士養成所 客員教授を兼任

連絡先：抄録集に記載